

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 93 号

2024 年 9 月

日本薬史学会 2024 年会(東京)のお知らせ(その2)

年会長 厚味巖一(帝京大学薬学部)

日本薬史学会の創立70周年記念となる2024年会は、これまでとこれからの薬史研究をつなぎ、人々の交流の拠点となることを願い、開催地である板橋に因んで“未来へと橋を渡す”をテーマとしました。

薬史研究のさらなる発展のきっかけとなることを期待し、一般講演に加えて、薬と食品に関する歴史を様々な視点から学べる場としてシンポジウムを企画しました。また、特別講演1は古典植物の研究で日本学賞を受賞された木下武司先生(帝京大学 名誉教授)、特別講演2・公開講演は「がん哲学外来」でご著名な樋野興夫先生(順天堂大学 名誉教授)にお願いしております。

薬に関する様々な業種の方々、次世代を担う学生、さらには薬剤師の方々が交流できる機会を目指し、日本生薬学会や日本医史学会、日本薬学会、日本病院薬剤師会との共催、学生・大学院生の参加費無料、日本薬剤師研修センターの研修会としての実施といった種々の取り組みによって、様々な方が発表し、参加しやすい環境を整えています。また、株式会社サエラによる「地域に根ざした薬局に成長するための道のりと能登半島地震の復興支援」をテーマとしたランチョンセミナーや情報交換会も実施します。

2024年会が皆様にとって実り多い機会となるように鋭意準備を進めておりますので、多数のご参加をお待ちしております。

【開催日時】

2024年11月2日(土)

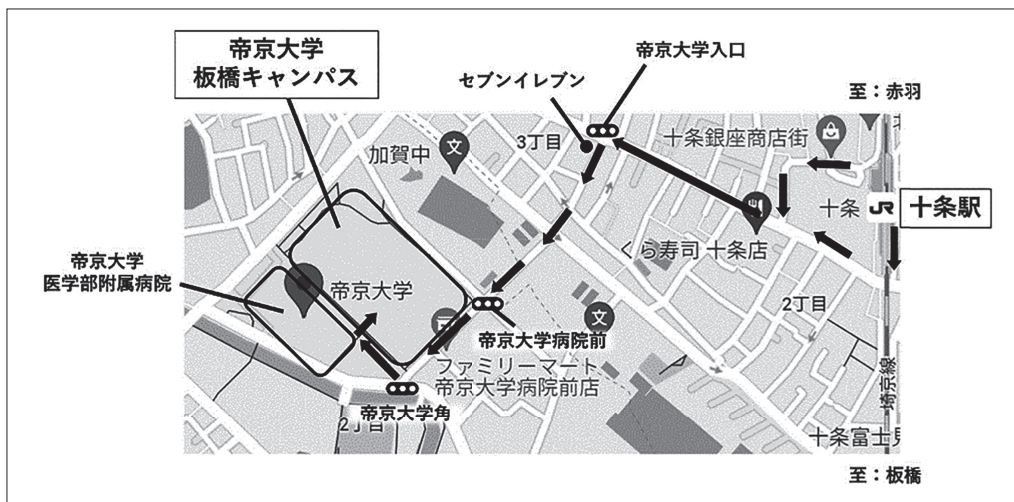
9:20～19:00(情報交換会19:00～20:00)

【会場】

帝京大学板橋キャンパス 大学棟本館2階209講義室
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1

【アクセス】

- ・十条駅(JR 埼京線)下車、徒歩10分、あるいは国際興業バス2番のりば『赤50H系統』帝京大学病院正面経由、赤羽駅西口駅行7分(帝京大学病院正面)下車
- ・王子駅(JR 京浜東北線)下車、国際興業バス6番のりば：板橋駅行10分(帝京大学病院)下車、あるいは7番のりば：帝京大学病院正面経由赤羽駅西口行15分(帝京大学病院正面)下車
- ・赤羽駅(JR 埼京線、京浜東北線、宇都宮・高崎線、湘南新宿ライン)下車、国際興業バス6番のりば：帝京大学病院正面経由王子駅行15分(帝京大学病院正面)下車
- ・板橋区役所前駅(都営三田線)下車、徒歩25分
※タクシーでお越しの際は、「帝京大学病院正面入口」とお伝えください。



十条駅からの案内図

【参加申込み】

以下の URL、あるいは QR コードから年会 HP にアクセスし、2024 年 10 月 25 日(金)までにお申し込み下さい。10 月 26 日(土)以降は、当日申込み扱いとさせていただきます。

HP : <http://square.umin.ac.jp/JSHP2024>



【年会参加費】

日本薬史学会会員

(事前申込み 4,000 円、当日申込み 5,000 円)

共催団体会員

(事前申込み 4,000 円、当日申込み 5,000 円)

※共催団体：日本生薬学会、日本医史学会、

日本薬学会、日本病院薬剤師会

学生・大学院生(無料)

非会員(事前申込み 5,000 円、当日申込み 5,000 円)

【情報交換会参加費】

日本薬史学会会員・共催団体会員・非会員(事前申込み・当日申込み 4,000 円)

学生(事前申込み・当日申込み 1,000 円)

【薬剤師研修センターの単位】

日本薬剤師研修センターの研修会として実施します(4 単位)。また、漢方薬・生薬認定薬剤師制度の研修会の対象です。

【薬史ツアー】

参加費 10,000 円(観覧料、昼食代込み)

集合時間・場所：11 月 3 日(日) 8 : 30 東京駅、あるいは 8 : 45 御茶ノ水駅

詳しい集合場所は参加申し込み者にご連絡します。

ツアーの内容：大型バスで巡る都内ツアー ①小石川植物園、②東京大学医学部・医学部附属病院健康と医学の博物館、③昼食(楠公レストハウス)、④国会参観(衆議院)、⑤科学技術館

解散時間・場所：

11 月 3 日(日) 16 : 20 東京駅、16 : 40 御茶ノ水駅(予定)

参加定員は 40 名(事前の申し込み順)とさせていただきます。

【年会事務局】

帝京大学薬学部病態生理学研究室内

TEL : 03-3964-8216

E-mail : jshp2024@teikyo-u.ac.jp

年会長 厚味厳一

実行委員長 山岡法子

実行委員 斎藤将樹、石橋賢一、入江真理

新会長就任のご挨拶

日本薬史学会会長 船山信次(日本薬科大学客員教授)

このたび、2024年(令和6年)4月から、第9代日本薬史学会会長に就任いたしました船山信次と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本薬史学会は、1954年に東京大学名誉教授の朝比奈泰彦先生を初代会長として発足し、今年は70周年の節目を迎える由緒ある学会です。初代会長の朝比奈先生と第4代会長の柴田承二先生(東京大学・明治薬科大学名誉教授)は、いずれも奈良東大寺の正倉院薬物の科学調査にも当たられ、それぞれ『正倉院薬物』と『図説 正倉院薬物』という大変に立派な報告書をまとめられました。

私が日本薬史学会に入会したのは、天然物化学専攻の大学院生になったばかりの1976年のことでした。実は私は、大学入学の際、単に花卉園芸への興味だけから薬学分野に進学したため、薬学とはどんな学問なのか、薬剤師の仕事はどのようなものかなどよく知りませんでした。実に幸いなことに薬学は私の性に合う学問で、爾来、学部～大学院の9年間はもとより今日に至るまで、実に楽しく過ごさせていただいております。ただ、学生の頃、だんだん好きになってきた「薬学」とは何かとか、「薬剤師の立場」はどうあるべきかなどの疑問もわいてきました。そこで、日本薬史学会に入会すればこれらの疑問の解決に役立つのではないかと考えたのが私の入会の動機でした。おかげさまで、会に所属することで種々学ばせていただき、未だに疑問の完全解決には至ってないものの、理解は深まったと思っています。

また、ひょんなことから柴田承二先生が執筆された正倉院薬物(甘草・人參・大黃)に関する邦文論文3本を1本の英文総説(S. Shibata, *Int. J. Pharmacognosy*, **32**, 75-89, 1994)にまとめる仕事に関与することになり、この頃からは奈良時代の毒や薬に関係する歴史にも本格的に興味を持つようになって今日に至ります。よって私の現在の薬史学分野の主な興味は「薬学と薬剤師」、そして「奈良時代の毒や薬に絡む歴史」ということになりました。

日本薬史学会は、学術発表の場として『薬史学雑誌』を刊行する他、年會を国内各地で開催しており、年會の際には薬史ツアーも実施、開催地の薬の歴史に関係する史跡などを巡ったり

して会員同士の親睦を深めています。また、柴田承二先生を記念した「柴田フォーラム」も、主に東京大学薬学部を会場として毎年開催され、薬史に関係ある著名な演者を招いて講演をしていただき、講演後には懇親会を開催しています。さらには、会員相互の親睦と連絡のための『薬史レター』の刊行、有志による薬史関係本の執筆や、支部における講演会の開催などの活動もなされています。

日本薬史学会は上記の様な様々な活動を通して、わが国の薬史に関する学術の進歩を目指している学会です。目指すところや実績は高いということを自覚しながらも、会員同士、楽しくお互いを高め合う集いにしたいと思います。今後ともこの雰囲気と目指すところは変えずに円滑に運営が進む様に努めたいと考えておりますので何卒どうぞよろしくお願い申し上げます。

2024年盛夏

船山信次(ふなやましんじ)のプロフィール：

1951年仙台市生まれ。東北大学薬学部卒業、同大学大学院薬学研究科博士後期課程修了。薬剤師・薬学博士。博士研究員としてイリノイ大学薬学部(シカゴ)留学の後、北里研究所技師・室長補佐、東北大学薬学部専任講師、青森大学工学部教授(弘前大学客員教授兼任)、日本薬科大学教授(同大学図書館長・薬用植物園長・漢方資料館長)などを経、現在、日本薬史学会会長・日本薬科大学客員教授。

著作に、『毒と薬の世界史』(中公新書)、『〈麻薬〉のすべて』(講談社現代新書)、『毒』(PHP文庫)、『毒



と薬の文化史』(慶應義塾大学出版会)、『毒の科学』(ナツメ社)、『アルカロイド―毒と薬の宝庫』(共立出版)、『絵でわかる薬のしくみ』・『世界を変えた薬』(以上講談社)、『毒が変えた天平時代―藤原氏とかぐや姫の謎』(原書房)、『毒があるのになぜ食べら

れるのか』(PHP新書)、『禁断の植物園』(山と溪谷社)など多数。毒や薬の歴史と文化に関する雑誌記事などの執筆、TV やラジオ番組出演も多数。

役員新任・退任挨拶

副会長就任のご挨拶

宮崎生子

企画委員長として微力ながら活動いたしていましたが、今年度より、この大変由緒ある学会の副会長を拝命いたしまして、とても緊張いたしております。

これまで、ただひたすら我武者羅に前に進むべく行動しておりました私は、本学会に加入させていただき、温故知新「故きを温ね、新しきを知る」という言葉の重みを知ることが出来ました。過去の事例や先人から得た学びを、いかに薬学の未来への発展に結びつけて行くか、この気づきを若い方々にも是非伝えてまいりたいと思っております

このコロナ禍の数年間を経て、また様々な活動を実施しやすい環境に戻ってまいりました。船山信次新会長を補佐させていただくとともに、皆様方のご協力を賜りながら、会員の皆様の今まで以上の交流に加えて、本学会への若い方々の参画が増えます様務めて参りたいと思っております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

会長退任と監事就任のご挨拶

森本和滋

2023年4月奥井登美子先生から、奥井清 一周忌追悼誌が届きました。

“恩師をかたる”の中で、「功遂身退 天之道也」仕事を終えた時には引退する。それが「天の道である」清先生の示唆に富んだ言葉に感銘を受け、4月22日朝、家内に来年3月で会長退任の決心を伝えました。

そして12月喜寿を迎えました。

この4年間は、コロナ禍の中、様々な困難、紆余曲折に遭遇しました。多くの方々の協力を得て、無事船山信次新会長にバトンを渡すことが出来たこと、感謝に堪えない気持ちでいっぱいです。御影雅幸企画委員長は、2021年公開講演会をオンライン開催へと導き、活性化して下さいました。その先生が、6月8日ご逝去されました。ご冥福をお祈りしております。

46th ICHP で口頭発表 accept の嬉しいメールが7月1日夕方、届きました。「倫理教育教材の開発：薬学・医学系学生の使命感と責任感の醸成」のタイトルです。これからは、会長時代には叶わなかった薬史学研究を楽しみたいと願っております。

船山会長と宮崎生子副会長を、監事として、しっかり支えて行きたいと思いをします。

理事就任のご挨拶

厚味厳一

この度、理事に就任いたしました帝京大学薬学部の厚味厳一です。日本薬史学会の70周年を記念する2024年会を11月にお世話にさせていただきます。薬学部を卒業し、教員として薬学部に勤めながら、薬学の歴史をあまりにも知らないことに気づかされています。これまで食による健康を目指した基礎研究を主として活動して参りましたが、今一度、「故きを温ねて新しきを知る」という言葉をかみしめつつ、理事の任務を勤めてまいりますので、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

総務委員退任ご挨拶

榊原統子

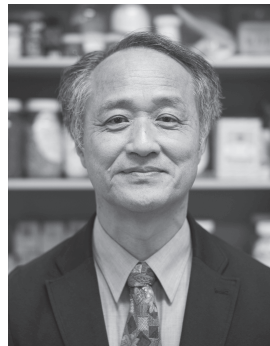
2016年より8年間にわたり総務委員として活動し、鈴木委員長、小清水委員長、松崎委員長のもと、大変貴重な経験をさせていただきました。特に、後半は新型コロナ禍となり、学会運営に変革をもたら

した時期でございました。Zoomの活用により、遠距離でも会議ができるという便利さを知るとともに、直接集まることの有難さを実感できる4年間であったと思います。先生方には多くのご指導ご鞭撻を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。今後ともよろしくお願いいたします。

有功会員に推戴されて

折原 裕

このたび今年度新たに設定された有功会員に推戴された折原です。私は薬学系研究科修士課程を修了後、北里大学薬学部生薬学教室に助手として就職しました。1996年東京大学薬学部附属薬用植物園に助教授として着任し、2020年3月定年退職いたしました。研究内容としては植物組織培養を用いた有用物質の生産研究を主として行っていました。2010年頃までは薬史学のやの字も知らずに過ごしてきたように思います。津谷先生のお誘いで朝鮮半島の歴史の研究会に参加するようになり、薬史学会の先生方ともお知り合いになることができました。2012年3月学会誌刊行センターの地下で開催される常任理事会にオブザーバーとして参加し、同年4月より常任理事として広報委員長ならびに柴田フォーラム委員に就任しました。広報委員長としては津谷第6代会長と共に薬史学会の公式ホームページの立ち上げを行いました。柴田フォーラム委員としては東大薬



学部勤めていた関係から会場予約とビアパーティを担当しました。

2016年3月津谷先生が病に倒れたとの報を受け、常任理事会には衝撃が走りました。丁度役員の改選年度であったこともあり、津谷先生が続投するものと常任理事全員が考えていたと思います。三澤会長代行の指名もあり、2016年に会長に就任しました。会長就任時には薬史学会の財政は危機的状況にありましたが、支出の大幅削減、投稿料の超過ページチャージの値上げなどを断行し、会長4年目には財政危機を脱しました。2019年頃から体調を崩し、森本副会長に後を託し、2020年から副会長、2022年から監事をそれぞれ2年間務め、現在に至っています。12年間常任理事会に参加し、いつの間にか古株になってしまいました。

私は薬史学の研究から薬史学会に入ったわけでは無く、学会の運営から薬史学会に関わってきました。学会員の平均年齢に達したこともあり、今後は一会員として学会活動に関わり、研究を楽しみたいと考えています。

日本薬史学会理事 御影雅幸先生を偲んで

日本薬史学会評議員 小松かつ子

日本薬史学会理事で元副会長を務められた御影雅幸金沢大学名誉教授が2024年6月8日にご逝去さ

れました。享年75歳でした。

御影先生は大阪のご出身で、1973年に近畿大学

薬学部をご卒業後、富山大学大学院薬学研究科に進学され、和漢薬研究所資源開発部門の難波恒雄教授のもとで生薬に関する研究に従事されました。高校時代から植物に興味を持たれ、シダ植物～高等植物に関する知識が豊富で、私が富山大学入学後、漢方クラブ企画の植物採集に参加した際には、顧問として様々な植物の名前を教えてくださいました。御影先生は1978年に資源開発部門の助手になられ、4先生で配属した私は直接、生薬の基源植物同定のための組織形態学や本草考証学を学びました。先生は1984年に「威霊仙の生薬学的研究」で学位(薬学博士)を取得されましたが、その中で威霊仙の基源の歴史的変遷に注力され、私たち学生には、現在使用されている生薬が本草書記載のものと同じであるか考証する必要性を常に説いていました。1980年代には難波先生を代表とする海外学術調査が2回、ネパール・ヒマラヤで実施され、私たちも同行させていただきました。アンナプルナ山系を臨みながらのトレッキングを約40日間行い、毎日植物採集と標本作製並びに伝統医薬学情報の収集をするのですが、常に御影先生が指導者でした。帰国後、植物標本を一人で整理、同定し、聞き取り調査の内容を報告書にまとめていた姿には頭がさがる思いでした。この調査でマオウ属植物に出会ったことが契機となり、後の麻黄の学際的研究に繋がったと聞いています。

御影先生は1998年に金沢大学薬学部に助教授として着任され、角間キャンパスにユニークな研究型薬用植物園を造られました。マオウ属植物などの栽培試験用ハウスもあり、先生の研究領域が広がった感がありました。海外調査も引き続き行われており、スリランカでは、痔瘻の手術に使われるアーユルヴェエダ薬線「クシャーラ・スートラ」の製造方法を学ばれ、一方、ネパールではマオウ属植物などの調査を継続されました。同属植物の調査はその後ヨーロッパ諸国などにも拡大され、形態分類のほか遺伝子解析を行うことにより、*Ephedra sinica* と *E. distachya* は別種であるなどの新知見を発表されています。先生の口癖は、「ほかの人がやらないことをする」でしたので、これらの現地調査を基盤にし

て、日本でもクシャーラ・スートラを開発する研究を始められました。日本産ヒナタイノコズチの灰やイチジクの乳液を用いた金沢系1号が2005年に開発され、現在医療の現場で使用されています。一方、麻黄について



は、中国で1999年から輸出制限されたことを受けて、国産マオウの開発を手掛けられました。中国内蒙古自治区などで *E. sinica* の栽培方法が調査され、同時にアルカロイド含量の個体差の解析と高含量株の探索、並びに園内での種苗増殖法の確立と系統選抜などの研究が、金沢大学をご退職される2014年まで行われました。特に栽培研究は、2013年に創薬基盤推進研究事業に採択されてから本格的になり、東京農業大学農学部の教授を務められた2022年まで続けられました。この間、能登半島に中規模栽培圃場が設置され、試験栽培に成功されるとともに、アルカロイド生産能の高い優良株を見出されました。このような偉業を達成された先生には敬服するばかりです。これらの研究と併行して、人參、防己、黄耆と晋耆、羌活と独活、大黄などの本草考証も行われ、本来の基源や使用法の歴史的変遷を解明されて、薬史学分野でも活躍されました。

以上で述べた様々な研究の成果は、200報以上に及ぶ学術論文として公表されています。また、『伝統医薬学・生薬学』、『ビスターリ ヒマラヤ』などの著書も広く読まれており、生薬学に多大な貢献をされました。さらに、2024年まで薬用植物栽培研究会会長、日本漢方生薬ソムリエ協会理事長、国産生薬生産普及協会会長などを務められ、社会的貢献度は群を抜いていました。これらの功績により、2024年6月に従四位、瑞宝中綬章を受章されましたことは、先生から教えを受けた者にとって大変喜ばしいことです。本来ならば生前にお祝いしたかったところであり、残念でなりません。

これまでのご指導に感謝し、心から哀悼の意を表します。

令和5年度(2023年度)日本薬史学会中部支部例会・講演会の報告

中部支部長 河村典久

日 時：2024年3月9日(土) 14:00～17:45

場 所：名城大学薬学部内(八事校舎)

新1号館・1階・1-117教室

●例会 飯田事務局長の司会

- ・令和6年1月28日の顧問水野瑞夫先生のご逝去に対して黙祷
- ・水野顧問の逝去に伴う中部支部役員等の更新について新顧問として森田宏(くすり博物館)館長を推薦し、承諾・承認された。
- ・岡山での薬史学会2023年会の報告
- ・最近の薬史学会の情報報告

参加者：奥田潤・同夫人、齋藤充生、桐原正之(静岡)、杉村啓治(岐阜)、松本和男(京都)、夏目葉子、南佳子、稲垣裕美、立松和見、森田宏、金兌勝、河村典久、風田顕良、野々垣常正、飯田耕太郎、宮本法子(東薬)、徳井健志、志茂将太郎、吉田かおり(以上20名 敬称略)

●講演会：

4名の講演は3時間半に及び、それぞれ質疑応答が行われ、建設的な意見交換が行われた。

①杉村啓治『伊藤圭介日記に見る柴田承桂・永坂 周(石埭)との交流』(薬史学会会員)

圭介文書研究会員として30年圭介日記の解説に参加した。圭介の三男謙三郎が29歳で病死。結核の治療薬としてヨードカリなどを用いたが、当時の治療薬について論説された。また、柴田承桂と実兄永坂周についても論説された。他にケンブリッジ大学に留学していた圭介の孫篤太郎への

ハガキを解説され、その詳細について論説された。

②稲垣裕美『高齢者の健康と認知症治療のあゆみ(仮)』(内藤記念くすり博物館)

高齢者の健康に関し、歴史資料から中風、ぼけ、健忘、認知症を探求され、その対策や治療法について論説された。

③奥田潤、金兌勝『近未来日本における少子高齢化、総人口減少問題と薬局薬剤師』(名城大学 名誉教授、ハーブ調剤薬局)

奥田先生は、近未来の薬局薬剤師の将来について話された。

又続いて金兌勝氏は、最近のAI、チャットGPTの歴史と問題点、さらに未来の対応について解説された。また、開局薬剤師として近未来の薬剤師は数居の低い薬局での来局者に対して相談に応ずることが必要と解説。また、今後は薬事トリアージの対策と、モバイルファーマシー(移動薬局)の必要性と、国民の心の健康を守る未来薬剤師としての対応について話された。

●演題募集と参加依頼について

令和6年度の例会を令和7年2月ごろ名城大学薬学部にて開催を計画しています。ご発表予定の方は、事務局までお知らせください。皆さんのご参加をお願い致します。

事務局：中部支部

名城大学薬学部 飯田耕太郎

〒468-8503 名古屋市天白区八事山150

TEL：052-839-2710(直通) FAX：052-834-8090

E-Mail：iida@meijo-u.ac.jp

東京からお邪魔しましたが活気にあふれた会でした。奥田先生・金先生のご発表はその後、ご投稿いただき、薬史学雑誌59(1)：90-101(2024)に掲載されています。今後も支部会活動の成果として論文が輩出されることを祈念いたします。

(齋藤充生)

海外の薬史学会の今(13) イタリア

国際委員会 宮崎啓一

2023年はイタリア薬史学会にとって、ことのほか活動が盛んな年であった。同年6月、Bresciaにおいて第71回全国大会が開催され、この機会に当学会は「マドリード2023年薬史学100周年」を記念するスペイン賞を受賞した。

当学会の活動の一環として同年2月、Bresciaで開催された「薬学の進展：古い薬局からサービス指向の薬局へ」と題した会議で、会員から「薬学の歴史におけるBresciaおよびBergamo」についての発表がなされた。

展示会として2022年12月から2023年2月にはFerrara大学のAteneo博物館で「好奇心、不思議…それは科学(1609-1895)」が公開され、2023年6月にBresciaのOspedali Riunitiで「Ospedali Riuniti図書館の古い薬学書籍」展が企画された。2024年のいくつかの予定についても報告がなされ、Pesaro

のVilla Caprileで5月に開催予定の第72回全国大会は、「薬史学における原典—薬と疾患に関する新研究—」を主テーマに開催される。

今回のイタリア薬史学会の報告を読み、古代ローマにフォーカスした研究を進めている私は以下のような感想をもった。古代ギリシアから古代ローマにいたって、ギリシア・ヘレニズム哲学の継承または折衷で始まった哲学に文学、宗教、法学、建築、医学および天文学が流入していったことが知られている。ここでは古代ローマの残滓と現在のイタリアとの間の歴史上の連続性については言及しないものの、昨年のイタリア薬史学会のプラグマティックにも思える活動の一端からは、イタリアの薬史学の奥深さとイタリア薬史学会会員の取組みの多彩さを伺い知ることができた。

東京大学薬学図書館展示見学記

齋藤充生

東京大学薬学図書館では、2024年度第1回展示「日本薬学の復興－戦中から戦後の歩み－」(7/16-

9/17)を開催しています。下記HPより解説資料等も入手できますので、ご興味のある方は是非、ご見

寄贈書籍について

70周年記念号に祝辞をいただいた香港薬史学会会長のDr. Patrick Chiuの新刊「A History of Western Pharmacy in China」(Springer, ISBN: 978-981-99-8634-7)に森本会長(当時)が推薦文(背表紙に掲載)を寄せたことで、書籍をお送りいただきました。森本監事のご厚意により、本書籍が広く利活用されるよう、これまでも寄贈実績があり、開館時間内は誰でも利用可能な東大薬学図書館の開架コーナーに寄贈する予定です。

薬史レターは学会HPからもご覧いただけます。

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/publication/letter/>

総会でも話題となりましたが、会員親睦のため、会員の皆様からのご寄稿をお待ちいたしております。

薬史レター投稿のヒント

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/wp3/wp-content/uploads/2022/01/yakushi-letter-hint41.pdf>

学ください。本展示は明治期の創設からの一連の企画で、今回の対象は戦中から戦後の薬学部独立までです。展示品は教科書、実習書、記念冊子などの書籍ですが、物資難からか、終戦直後のものは変色が進み、保存修復を施されているようです。薬学部独立は現在の教授陣の3代前くらいとなり、創立からの折り返しの時期に当たります。展示、年表には、薬史学会関係者をはじめ、「先生の先生」として同門会などでお会いした先生方のお名前も拝見し、図書館

の重要性を改めて感じ、会場を後にしました。本会評議員でもある飯野洋一氏による展示解説資料は非常に充実しており、多数の参考文献、年表、人物伝など、今後の研究の道標となるものと感じました。通史展示としては今回で一区切りのようですが、今後もテーマに応じた薬史学文庫資料を活用した企画展の開催を望みます。

https://www.lib.f.u-tokyo.ac.jp/tenji_nihonyakugakunofukkou_2024/

〔Book紹介〕

安士昌一郎 著

「日本薬業界の先駆者達」

A5判 178頁 3,740円(文真堂 2024年3月15日発売)

ISBN 978-4830952487

本書では日本薬業界の先駆者たる道修町御三家(12代田邊五兵衛、五代武田長兵衛、二代塩野義三郎)がいかにして、薬種問屋から製薬企業への変革を、激変する時代環境の中で意思決定し果断に行ったことを記載しています。

変革の難しさは老舗企業ほど難しいです。田邊五兵衛商店を例にとると、田邊のスタートは、1678(延宝6)年で振出薬「たなべや薬」の製造販売の開業です。世界最古の医薬品会社「メルク」の1668年創業とほぼ同じです。歴史が古く過去の成功体験が強い会社ほど変化に対応することが難しいといわれています。

しかし、道修町の先駆者たちは環境変化に的確に対応し、現在も製薬会社の大手として活躍しております。どのようにして自己変革できたのかを本書は解説しております。また同一時期に活動し、一代で製薬企業を起こし大成功した星製薬・星一も取り上げ、比較して企業変革の違いを紹介しております。

内容は幅広く、江戸期では「薬屋の起こり」についてから始まり、道修町の(発祥、薬種仲買仲間の成立、その活動と権限)を、明治期では東京司薬場の設置、東大薬学部の前身の製薬学科創立、日本薬局方の公布、第一次世界大戦による医薬品払底等、当時の概

況を伝えています。

企業家活動では、十二代田邊五兵衛は先見性に優れ、いち早く洋薬取扱、自家製薬の開始、新薬の開発、田邊元三郎商店の東京進出を英断しました。五代武田長兵衛は組織変革と人的ネットワークに優れ、きめ細かな管理を行い、弟の武田二郎(東京帝国大学薬学科卒)と連携し、東大薬学科教授の朝比奈泰彦との技術指導を推進しました。二代目塩野義三郎は、早期から自家製新薬に注力し、乙卯研究所を設けて近藤平三郎の指導を仰ぎ技術開発力を育成しました。星一は超人的なリーダーシップを発揮して、一代で企業を立ち上げました。教育に関しては星薬科大学を設立した。老舗企業のリーダーと一代で企業を起こしたリーダーとはタイプがちがいます。

しかし、どのような激動の時代においても、機会をとらえ人材を育成し、社外ネットワークを整え、組織を創れば、発展は可能であることを本書は述べております。

(内藤記念くすり博物館 森田宏)



〔Book紹介〕

岡部進 著

「くすりの発明・発見史」

文庫判 336頁 1,144円(KADOKAWA 2024年4月25日発売)

ISBN 978-4044007461

2007年に南山堂から刊行された単行本に新たに新型コロナワクチンを含むワクチンの項などを加筆修正し、角川ソフィア文庫として発刊されたものである。著者は薬理学者で、古代の汚物薬から、麻酔薬、強心薬、抗マラリア薬、



ホルモンの発見など、12章で構成され、発見に関係した人物の相克が、関連の文学作品や時代背景、現代的意義、著者が実際に訪れた記録と共に活写され、上質の推理小説のように読み進めることができる。

(齋藤充生)

〔Book紹介〕

浅見潤 著

「奈良とくすりー祈りと治療の歴史」

新書判 164頁 1,100円(京阪奈新書 2024年7月15日発売)

ISBN 978-4878067594

本会会員による近著で、同じく会員の西原正和氏による「大和当帰」の寄稿もある。万葉集に詠われた薬草から、推古天皇の時代の薬獵、光明皇后の施薬院、悲田院と正倉院「種々薬帳」の薬物、興福寺などの秘薬とそこから派生した大和の置き薬、コロナ禍で厚労省も資材に採用したアマビエを題材



に天然痘・コレラなどの感染症と祈りなど、奈良を主な舞台に古代から現在までの病気に対する祈りと治療の歴史が豊富な資料や写真とともに示されている。著者、寄稿者とも奈良の薬史を一般の見学者向けに講演・解説されることが多いお立場にあり、大変読みやすく、森本会長(当時)の巻頭言にもあるように、地域に根差した薬史学研究として、今後の新たな研究の方向性とその普及活動を感じるものであった。

(齋藤充生)

70周年記念号の舞台裏

薬史学雑誌70周年記念号59(1)の編集後記に森本和滋記念事業委員長がご記載のとおり、記念座談会は(一社)情報科学技術協会(INFOSTA)の全面的なバックアップで行われました。AI活用など最新の技術を駆使したDX事業の過程を吉野敬子記念事業副委員長が情報の科学と技術. 74(7):278-279(2024)にご寄稿されておりますので、ご紹介いたします。

https://doi.org/10.18919/jkg.74.7_278

旅にあれば歴史の世界へ、 新たな研究テーマを求めて

牧 純(薬史学雑誌編集委員、千葉県立保健医療大学非常勤講師)

まだコロナが気になるが、旅にあれば歴史の世界に浸る私の再訪先は、少年期を過ごした静岡県浜松市、さあ出発！夜明け前、寝ぼけ眼のまま乗り込み、列車内でふと目が覚める頃、眼下には伊豆沖に浮かぶ初島。源実朝の和歌も浮かぶ。箱根路を超え眼に染み入るのは初島(斎藤茂吉説、原記は小島)なる感無量の表現。実朝は、『喫茶養生記』(1214)の著者で臨済宗の栄西とも交流あり、茶が布教と共に広まったという趣旨(小川鼎三著『医学の歴史』中公新書他)を15コマの薬学史の講義などで教える(拙著『国際医薬史入門』青山社)。列車はまもなく熱海に滑り込む。ここの乗り換えは慌ただしい。駆け込み乗車後、息をつく間もなく長い丹那トンネル、富士の雄姿を思い描いて亦もや落ち着かない。ユネスコ世界遺産に登録された「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」に心躍る。登録準備段階では自然遺産かと想像。実は、文化遺産。巡礼、詩歌・美術、蓋し一茶の句、北斎の

版画「凱風快晴」、羽衣伝説等々、日本人の心に集積の重みを物語っているのであろう(2013年報道など)。列車は茶の大規模栽培で有名な牧之原台地を過ぎ、県中西部を走り続ける。芸術作品宛らの茶畑は一部太陽光パネル。しかし、伝統的景観は健在だ。気づくと「…富士をあなたに(晶子)」の浜松に到着。富士に似合うのは、菜の花や月見草よりは、やはり茶畑！と脳裏に焼きつけられたまま下車、臨済宗の名刹、奥山方広寺にも魅かれる。茶の価値が禅修行、健康飲用のみならず、消臭、抗菌でも注目されて久しい。静岡茶から環境対策目的で最近開発された「おちゃちゃ(EI製)」を入手、各種データ、その他も検討中。中々の優れものがありそうだ。茶を最大限有効活用せんとする郷土の心、環境への優しさに改めて感服する。富士の伏流水、蜜柑、鰻、家康の漢方等は、今回割愛。薬史学の研究テーマを絞り込むには、静岡県はあまりに膨大だ。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：齋藤 充生

編集委員：赤木 佳寿子 武立 啓子 牧 純

薬史レター 第93号 2024年9月

編集人：齋藤 充生 発行人：船山 信次

日本薬史学会 The Japanese Society for the History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (一財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp

<https://plaza.umin.ac.jp/yakushi/>

所属先、住所、アドレスなどの変更が生じた場合には、学会事務局へ必ずご連絡ください